



響け! カリヨン ～ハンドベル～

会員 坪井 節子 (32期)



ハンドベルとの出会い

ハンドベルとは、異なる音程をもつ柄のついた大小様々なベルを、ひとつないし数個ずつ担当する演奏者が一列に並び、楽譜を見ながら、それぞれ自分の担当の音を打ち鳴らして、全員でメロディーや和声にまとめる楽器演奏である。

私の所属しているキリスト教会では、毎日曜日の礼拝の中で、ハンドベルクワイヤが讃美歌を演奏する。素朴で澄んだ柔らかく深みのある音色で、天使が奏でる音楽という表現がぴったりである。クワイヤ席は、礼拝堂の2階ギャラリーにあるので、清らかな鐘の音が天上から降ってくるような感覚になる。手が足りないのです、時折私も演奏者や指揮者として、手伝うようになった。

演奏者は白い手袋をして柄をしっかり握り、手首のスナップをきかせてベルを打つ。ハンドベル用に編曲された楽譜の自分の担当する音に印をつけておき、拍子にあわせ、周囲の音を聞きながら、自分の音の順番がきた瞬間にベルを打つ。初めての人でも、楽譜を読めない人でも、すぐに演奏に参加できる。皆で音とリズムと心を合わせることによって、いつの間にか美しい曲が仕上がっていく。楽しい。ただ、上手な人のベルの音と、私のような新参者が打つベルの音は、明らかに違う。入口は簡単のように見えて、実に奥は深いのである。



カリヨンクリスマス会でのハンドベル演奏

カリヨン子どもセンターとハンドベル

2004年に、弁護士が中心になり、困難を抱える子どもの緊急避難場所（子どもシェルター）を運営するNPO法人（現在は社会福祉法人）カリヨン子どもセンターを設立した。「カリヨン」とは、ヨーロッパの教会の塔の中に釣り下げられた大小様々な鐘のことである。塔の下にある鍵盤で鐘を操作して鳴らしているが、昔はひとつずつの鐘に綱が下がっていて、たくさんの人が、順番に綱を引いて鐘を鳴らし、メロディーを奏でていたそうである。

ハンドベルは、カリヨン演奏の練習用に作られたのだそうだ。私は法人設立後に、その歴史を知って、何とも不思議な巡り合わせに驚いた。教会には、ハンドベルクワイヤ創設時に使っていた、2オクターブのハンドベルセットが保管されていた。このセットの寄贈者の勧めもあり、カリヨン子どもセンターで、子どもたちと一緒にハンドベルを演奏しようということになった。

子どもシェルターや、自立援助ホームに入居している子どもに声をかけ、職員や理事や子ども担当弁護士と一緒に練習をした。音楽に縁のなかった子どもでも、すぐにできるようになり、カリヨン子どもセンターの支援者との交流コンサートや、クリスマス会などで、披露するようになった。子どもは次々と代替わりをしていくが、それぞれの胸に味わい深い思い出が残っていく。

ひとつひとつの鐘の音色は違うけれど、その鐘が響き合えば、美しいメロディーを奏でるハンドベル。ひとりひとりの子どもは違うけれど、ひとりぼっちじゃない、一緒に生きていこうという、カリヨン子どもセンターの希望が、ハンドベルの音色にのって、これからも響きわたることを祈る。